



国水研だより

NATIONAL INSTITUTE FOR MINAMATA DISEASE

No. 9
'01 8月号

目 次	研究センターの動き	2
	水俣病情報センター開館記念式典	3
	水銀国際会議へ向けて	4
	外国人滞在記録	5

海外見聞録	5 ~ 6
新職員紹介	7
業務紹介	7
水銀のはなし	8
編集後記	8



水俣病情報センター開館に当って

国立水俣病総合研究センター
所長 野 村 瞽

去る6月9日に当研究センターの付属施設として、水俣病情報センターが明神町にようやく開館いたしました。「水俣病情報センター建設準備委員会」、「水俣病情報センター懇話会」等において、これまで水俣病情報センターの建設、運営についてご意見を賜った関係者の皆様方に心から御礼申し上げます。

水俣病情報センターの設置は、1995年12月の水俣病問題の政治的解決に当って出された閣議了解の中に「国立水俣病研究センターにおいて水俣病発生地域としての特性を生かした研究機能充実等を図る」とあり、これを土台として検討され実現したものです。

水俣病情報センターの機能としては、①水俣病や水銀に関する資料・情報の収集、整理、保管、提供 ②水俣病や水銀に関する展示 ③講話、研究発表、国際会議等のための講堂（ホール）の利用 ④水俣病に関する健康相談 ⑤共同研究者による研究室の利用があります。

これらの機能の中で当面最も力を入れなくてはならないと考えているのは①の機能です。特に水俣病に関する資料としては環境省、熊本県、水俣市等の行政機関、当研究センター、熊本大学等の研究機関、チッソ(株)、関係団体等が各々の立場で保管されているものと考えられますが、45年の長い経過を考えると散逸する可能性の高いものや傷んでいるものもあると予想されます。従って出来るだけ早く収集、修復作業に入らなければならないわけです。水俣病事件史の今後の更なる解明のためにも資料の収集、保管は大事な責務であると考えています。

資料・情報の提供については、内外の研究者の方々には勿論のこと、患者さんや市民の方々にも積極的に利用していただけるよう配慮していきたいと思います。これまで研究センターは山の上の遠い存在であったようですが、もっと身近かな存在として活用していただければと願っています。

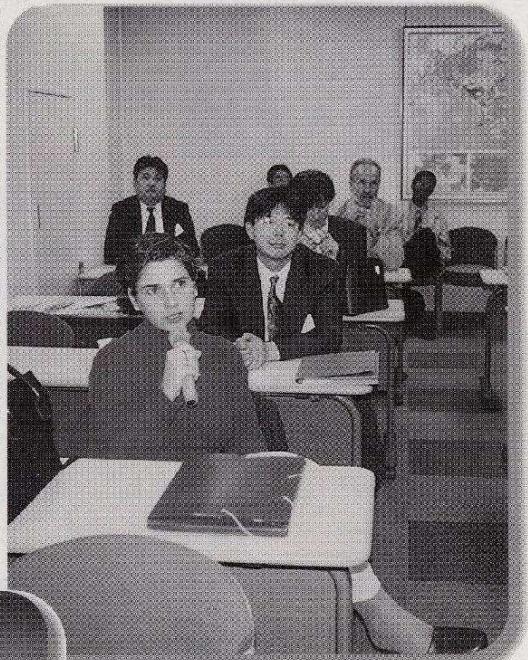
水俣病情報センターの運営については、引き続き「水俣病情報センター懇話会」を定期的に開催して関係者の皆様方のお考えも頂戴しながら進めてまいりたいと思いますのでよろしくお願ひ申し上げます。

研究センターの動き

- 1月16日(火)～17日(水)………水銀汚染対策マニュアル会議
3月 5日(月)……………平成13年度研究企画会議
3月19日(月)～20日(火)………NIMDフォーラム(写真)
3月21日(水)～22日(木)………水銀国際会議プレ会議(写真)
5月 1日(火)……………川口 順子環境大臣水俣病犠牲者慰靈式出席
6月 9日(土)……………水俣病情報センター開館記念式典(写真)(風間 環境副大臣出席)



水俣病情報センター開館式典



質問をするコスタ先生(ブラジル)



水銀国際会議プレ会議



NIMDフォーラム会場風景

水俣病情報センター開館記念式典



水俣病情報センター全景



風間環境副大臣・潮谷知事らの館内見学

『水俣病の悲劇を繰り返さないために』

杉本栄子（水俣市立水俣病資料館担当） 高峰 武（水俣日報社企画部編集長）
原 育美（環境ネットワークくまもと事務局長） 森枝卓士（写真家・ジャーナリスト）
吉井正澄（水俣市長）



開館記念座談会のパネリスト

国際・情報室 永井 克博

国立水俣病総合研究センターでは、水俣病に関する資料、情報を一元的に収集、保管、整理し、広く提供するとともに、水俣病に関する研究を実施することを目的として、市内明神町に「水俣病情報センター」を開設いたしました。

6月9日の開館日には、関係者によるテープカットの後、開館記念式典が開催され、風間 祥環境副大臣、潮谷義子熊本県知事、西川京子衆議院議員、吉井正澄水俣市長、浜元二徳水俣病資料館語り部の会長らが、それぞれ挨拶、祝辞を述べ、水俣病情報センターが果たすべき役割や水俣病情報センターへの期待について話されました。

また、記念式典の後、水俣病資料館語り部の杉本栄子さん、熊本日日新聞社社会部長の高峰 武さん、環境ネットワークくまもと事務局長の原 育美さん、写真家・ジャーナリストの森枝卓士さん、および水俣市長の吉井正澄さんによる開館記念座談会「水俣病の悲劇を繰り返さないために」が、100人以上の聴衆の参加を得て開催され、地球環境や豊かな

自然を守るうえでの一人ひとりの行動の重要性、もやい直しの大切さなどについて、活発な意見が交わされました。

なお、2階にある「展示室」は、隣の水俣病資料館と渡り廊下でつながっており、一般の皆さんにご利用いただけますので（入館無料）、どうぞご来館ください。開館時間は午前9時から午後5時まで（入館は午後4時30分まで）、休館日は月曜日です（月曜日が祝日、休日の場合は翌日）。

水俣病情報センターの一階、玄関から入ってすぐ左手に「水俣病健康相談室」があります。ここでは水俣病に関する健康相談を毎週木曜日に受け付けています。どうぞお気軽に立ち寄りください。

木曜日 9:00~16:30 ☎0966-69-2400

木曜日以外の問い合わせ先

☎0966-63-3111

Countdown to 6th ICMGP MINAMATA, 2001 (水銀国際会議へ向けて)

「第6回環境汚染物質としての水銀に関する国際会議」の開催まで、あと2ヶ月余りとなり、事務局員一同、その準備のために多忙をきわめています。一口に準備といっても、会議本体（研究成果の発表や質疑応答）だけでなく、歓迎パーティー、案内板の設置、市内観光や宿泊の手配、さらにそれらを行うための予算の管理も重要な作業です。また、会議に付随していろいろの催しものも計画されており、それらの調整などなど、バラエティーに富んでいます。その仕事の量と多様性は、とてもセンター職員だけの手におえるものではありません。準備のコアとなる「国際会議事務局」には、熊本県と水俣市の職員の方々も参加しており、定期的に会議を開きながら、まさに事務局一丸となって、着々とコトを進めているといった状況です。

少し、会議本体の準備作業について紹介しましょう。まず、2月から3月にかけて、山のように寄せられた演題抄録（A4版の紙約半分を使ってびっしりと書かれた英文です）の仕分けが一つのピークであったといえましょう。この作業は、去る3月、国内外の10人余りの「運営委員」が一堂に会し、そ

れまでに寄せられた550余りの演題抄録を、片っ端から5つの研究分野に分類し、かつそれぞれの分野ごとに、口頭発表、口頭発表付きポスター発表、そしてポスター発表の3種類の発表形態に分け、なおかつ発表の順番まで決めるというものです。彼らは、たった2日の間にこれらの作業を終え、プログラムの骨格を作りあげてしまいました。その精力的な仕事ぶりは、「さすが運営委員！」と、ただ感心するしかありませんでした。

さて本番まであとわずか、国内外からの参加者の方々に、少しでも会議を、また水俣を満足していただるために…。

（ICMGP事務局 AY）



運営委員に説明する赤木委員長

NIMDフォーラムって？

これまで「国水研だより」にちょくちょく顔を出している「NIMDフォーラム」、この場を借りて少し説明しましょう。ちなみに研究社の大英和辞典で「forum」をひとと、「フォーラム：古代ローマ帝国の都市の中央にあった大広場で、商業取引の場、または裁判・政治など公事の集会所として用いられた」とあります。現在では、これから転じて「公開討論会」の意味に使われることが多いようです。さて、NIMDフォーラム、1997年7月に国際研究協力棟が設立された時、その1階会議室のこけら落としに、海外の研究者も交えての研究発表会を計画いたしました。その時、会のタイトルをどうするか、ということになりました。それまでセンターが主催してきた国際集会には「水銀の○○に関するワークシ

ュップ」といったタイトルを使ってきたわけですが、「○○」にもってくる言葉もそろそろネタ切れになりつつあった頃でした。いろいろな意見が出た挙句、「フォーラム」ということばの採用が決まった次第です。その頭にセンターの英名の略号であるNIMDを付け、後に年号を付ければ、「○○」部分に苦労することなく、ずっと同じ名称を使用できる、といった利点もあります。

1997年の「NIMDフォーラム'97」を皮切りに、「'99」、そして今回の「2001」と、これまで計3回開かれました。そしてその結果は、1cm程の厚さのプロシーディング（報告書）にまとめられています。これも3冊たまりました。今後も2、3年おきに「NIMDフォーラム」が開催できるよう、私たちセンター職員も日頃の精進が必要です。最後に読み方ですが、できましたら、「ニムドフォーラム」ではなく、「エヌアイエムディフォーラム」と読んでいただけだと幸いです。

（AY）

○ 外国人滞在記録 (平成13年1月~7月)

氏名 (国籍)	所属・役職	招聘期間または滞在期間
E.E. Graevskaya (ロシア)	国立モスクワ大学	(11.5) ~ 2.5
A.T. F. Rivera (フィリピン)	保健省労働保健部	2.15 ~ 2.28
A.G. Manglicmot (フィリピン)	国立毒性管理情報センター	2.15 ~ 2.28
R. Rajar (スロベニア)	リュブリアナ大学	3.5 ~ 3.29
L. Li (中国)	中国貴州省環境保護科学研究所	3.3 ~ 3.29
S. Yuman (中国)	中国貴州省環境保護科学研究所	3.3 ~ 3.29
L. Jing (中国)	鹿児島大学医学部	3.12 ~ 3.21
M. Costa (ブラジル)	ペルナンブコ連邦大学	3.15 ~ 3.24
M. Horvat (スロベニア)	ジョセフ・ステファン研究所	3.17 ~ 3.30
J.R. Ikingura (タンザニア)	ダルエスサラーム大学	3.17 ~ 3.25
J.H. Munthe (スウェーデン)	スウェーデン環境研究所	3.17 ~ 3.24
R. Melamed (ブラジル)	鉱産技術センター	3.15 ~ 3.24
R.E. Wyzga (アメリカ)	電力研究所	3.16 ~ 3.23
M.M. Veiga (カナダ)	ブリティッシュ・コロンビア大学	3.16 ~ 3.23
S.E. Lindberg (アメリカ)	オークリッジ国立研究所	3.16 ~ 3.23
V. Fajon (スロベニア)	ジョセフ・ステファン研究所	3.23 ~ 3.29
P. H. Sheng (中国)	熊本大学医学部	4.16 ~ 6.30

海外見聞録

水俣病経験の普及啓発のための ベトナムセミナーに参加して

社会科学室 蜂谷 紀之

環境省などの主催で毎年開催してきた普及啓発セミナーの第5回目が、2001年3月7日ベトナムのハノイ市で開かれました。水俣病の経験や教訓を直に伝え、途上国などに環境汚染による様々な影響や環境保全の重要性を再認識してもらうのが目的です。今回も水俣市や新潟県のご協力を得て、患者や市民の代表、水俣市および新潟県の担当者、当研究センターおよび環境省職員など総勢14名が日本から派遣されました。このうち水俣から参加したのは6名でした。セミナーはハノイ市中心部にあるホテル・メリヤ・ハノイを会場に、行政担当者、各機関の研究者、医療関係者など約200人が集まりました。日本からの参加者は、水俣病発生当時から今日に至るまでの経緯や体験、行政による対策や企業の責務、有機水銀による健康影響の発生を防ぐための研究紹介など、それぞれの立場から発表を行いました。またベトナム側からも水銀汚染の現状などについての報告がありました。

ベトナムは社会主義国家ですが、1986年から始ま

ったドイモイ（刷新）政策のもと、経済も比較的順調に発展しています。そんな中、環境問題への関心も高く、この分野でも日本に対する期待の大きさを感じました。それと同時に、熱帯に位置し、寄生虫症を含む感染症対策が最大の衛生問題であるこの国において、社会状況や経済的背景の異なる日本での水俣病の教訓を効果的に伝えることの難しさも実感しました。

はじめて訪れたベトナムでしたが、ハノイの人も街もバイタリティーにあふれていました。ハノイでは電車や車の代わりにバイクがもっぱら市民の足となっていました。狭い道路もあふれんばかりに走っていたのが印象的でした。会場および宿泊地となったホテルの脇には、ホテルの立派さとは対照的な庶民の市場がありました。中国の食文化なのでしょう、日本では普通ペットや番犬にされる動物の丸焼きが売られしていました。これはわれわれ一行の間でとくに人気（？）が高く、みな一度は見に行ったという隠れた名所になっていました。



セミナー会場にて (日本からの参加者とベトナムの発表者)

水銀による土壤汚染地区の環境調査 中国・貴州省

自然科室 保田 叔昭

有機化学工場からの排水が灌漑用水路に導入されていたために、工場排水に含まれていた水銀化合物が農地を汚染してしまった問題で、中国・貴州省、清鎮市周辺の環境調査が継続されています。去る平成12年11月には、これまでの共同研究をいったん終了して、新たに土壤の水銀の存在形態の研究などを加えた、第2次共同研究を開始するため、当センターから、所長以下3名の研究者が現地の研究機関である貴州省環境保護科学研究所（以下、環保研）へ派遣され、共同研究の覚え書きを交換してきました。

その覚え書きに従い、同13年3月、および6月にそれぞれ3名の研究者を現地へ派遣し、環保研の研究者と共に、汚染地区と、非汚染対照地区へ出向いて、住民の毛髪や尿を採取し、同時に食生活や健康に関するアンケートを実施しました。これは、水銀化合物を含んだ土壤の上で生活している住民に、水銀の

影響が出るかどうかを調べるもので、また、汚染土壤を持ち帰り、水銀除去処理と土壤再生の基礎実験を開始しています。

6月の調査期間中には、環保研が組織替えを行い、貴州省環境科学研究設計院と改名して、その開所式が行われる場に立ち会うというおめでたい出来事もありました。この組織替えに伴って、水銀による環境汚染問題については中国全土で中心的な役割を担わされることになったようです。私たちとの共同研究事業も、この発展に一部寄与したと聞いて大いに面目を施した次第です。



貴州省環境科学研究設計院の開所式

日本での研修について

中国貴州省環境科学研究設計院 分析測試中心

劉 鶴（りゅう・り）

中国の西南部の貴州省にある水銀鉱山とその水銀生産量は、中国では第一位を占めています。貴陽市の近くにある貴州省有機化学工場は、酢酸の原料となるアセトアルデヒドを作るときの触媒として水銀を使用します。鉱山と工場の周辺は水銀で汚染されています。1996年に、貴州省環境科学研究設計院と日本の国立水俣病総合研究センターは、貴州省有機化学工場の排水による、環境や人への健康影響について共同研究を開始しました。

共同研究期間中、研究センターの招聘で、私と沈玉曼は、今年の3月に1か月間こちらに滞在しました。研究センターを訪問したのは、これで2度目になります。水俣は人口が数万人の小さい町ですけれど、風景は綺麗である上、住民も親切です。感動したのは、私達が道に迷ってしまい、女人に尋ねたところ、その人は車で目的地まで送って下さったことです。内陸に住んでいる私達にとって、果てしない海は気分をすごく良くしてくれるものです。

研究センターではそこの職員と共に、中国で採

集したサンプルを分析しました。貴陽市百花湖地区の魚、貴州省有機化学工場周辺住民の毛髪と尿の総水銀、メチル水銀などの測定を行った結果、住民への水銀汚染の影響は見出せませんでした。

実験の他に、私達は日本の先生方と恋路島へ行って海岸動物のサンプルを探りました。その後みんなで日本料理を食べました。

3月28日に水俣を去って、中国へ帰国しました。

今回の研修で、私達は見聞を広めることができ、新しい分析方法も学ぶ事が出来ました。今後、わたしの仕事に必ず役に立つと確信しています。



海岸動物の採集を終えて記念撮影（右から3人目が筆者）

新職員紹介



所長 野村 瞽

(出身地：東京都)

4月1日に所長として赴任しました。以前に熊本県庁と環境庁で各々3年間水俣病行政に携わった経験がありますが、その頃と状況が変わりましたし、研究職という立場ですので、また新しい気持ちでセンターが担うべき課題に取り組みたいと考えております。どうかよろしくお願ひ致します。



国際・総合研究部 山崎 学

(出身地：東京都葛飾区)

海、山、川と自然豊かな水俣に来て数ヶ月がたち、こちらの生活にもだんだんとなれています。今は6月9日に開館した水俣病情報センターにいます。みなさんのご来館をお待ちしております。



基礎研究部 足立 達美

(出身地：大分市)

4月に3年9ヶ月ぶりに水俣に戻ってきました。気持ちを新たにしてがんばります。

業務紹介

ライフワーク

臨床部長（主任研究企画官） 衛藤 光明

平成6（1994）年4月に当センターに赴任以来7年以上の歳月が過ぎ去りました。昭和43（1968）年4月に熊本大学医学部卒業後第二病理学教室（主任教授武内忠男先生・現熊本大学名誉教授）に入局して、神経病理学に興味があったことから、水俣病の病理学的研究を開始しました。

恩師武内先生は大分県日田市のご出身であり、小生も大分県三重町の出身で、県外出身者が水俣病に長年かかわることになったのは興味あることと思われます。

入局後4～5年した頃、水俣病関係の解剖に追われるようになり、社会的問題から生ずる様々な重圧に怯むこともありました。そんな折、昭和49（1974）年に23歳の重症患者さんの病理解剖を経験しまし

た。5歳で発症、18年間植物状態で過ごされた患者さんです。罪無き人に斯くも悲惨な疾患が、と悲痛と激しい怒りを覚えました。この病理解剖により、一介の神経病理医であった私に、水俣病に取り組んでいく覚悟と勇気を与えられたと思っています。ご遺体の病理所見はその後の研究に貴重な貢献を頂いています。

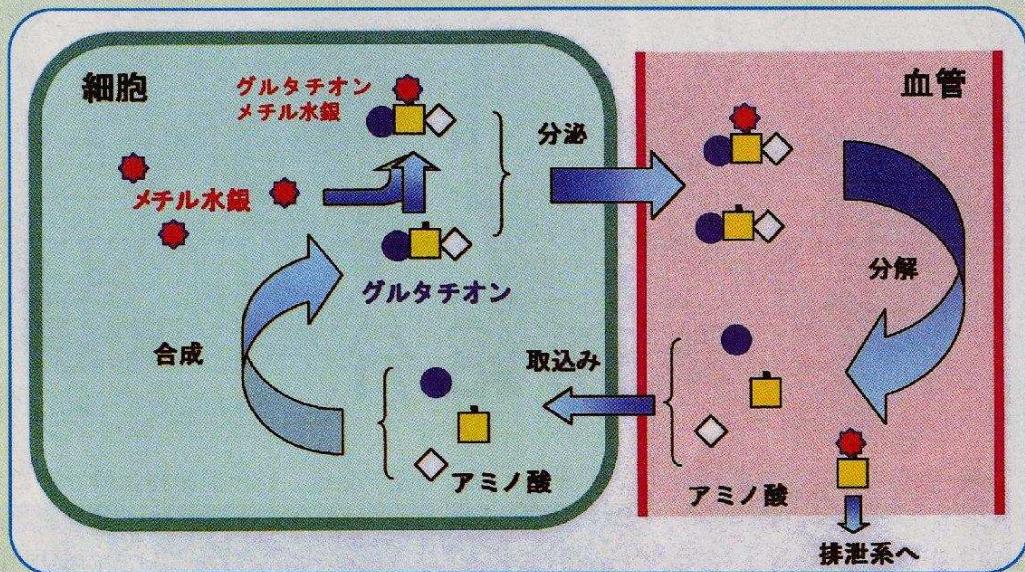
現在は主任研究企画官であると共に、臨床の一端を担っています。また、この外に発展途上国からの研修者や見学者に水俣病の実態を理解していただくために、水俣病の臨床症状、病理、疫学等の教育を受け持っています。一方、非常勤講師として、熊本大学医学部、その他の大学の学生に対して水俣病の病理学講義を行っています。

今後更に、水俣病情報センターやリサーチ・リソース・バンクの資料収集等、積極的に協力して、水俣病の経験や研究を世界に発信していきたいと思います。

これまでの話からおわかりのように、私たちは日々の生活の中で、ほんのわずかですが、絶えずメチル水銀をとり続けています。さて、体の方は大丈夫なのでしょうか？今回はその疑問にお答えしましょう。下の図をご覧ください。細胞の中では、いろんな物質が作られたり、壊されたりしながら、活発な代謝系を営んでいます。細胞の中には、3個のアミノ酸がつながった「グルタチオン」という物質がたくさんあります。このグルタチオンは、細胞内で次々に作られる一方、片っ端から細胞の外（血液中）に放り出されています。そして、細胞の外で3個のアミノ酸に分解されて、また細胞の中に入り、これを材料にして再びグルタチオンが作られます。ちょっと考えると、とても無駄なことを繰り返しているように

水銀のはなし その8 解毒の中の 体の毒剤

見えます。しかしグルタチオンには、いろいろな有毒物質と結合する性質があり、メチル水銀もその一つです。つまりグルタチオンは、「細胞の中に入ってきたメチル水銀をつかまえて外に放り出す」という役割を担っている、いうなれば「メチル水銀の解毒剤」ともいえます。グルタチオンの量、代謝の速度は組織毎に異なります。その量が多いほど、そして代謝が活発なほど、その組織はメチル水銀の毒性に強くなります。体の中で最も代謝が活発なのは肝臓と腎臓です。逆に脳は代謝の遅い組織の代表です。たとえば、10 ppmくらいのメチル水銀が肝臓や腎臓に溜まつても、何の障害もおこりませんが、脳に溜まると、やがて神経症状の現れることが動物実験で確認されています。(AY)



梅雨も明け、本格的な夏がやってきました。今年は猛暑らしいですね。皆さん、水分補給は充分にした方が良いと思いますが、ビールの飲みすぎには注意しましょう。何事もほどほどが一番！！

ところで先日オープンした水俣病情報センター、覗いてみられましたか？是非、一度お立ち寄りください。お待ちしております。

(M. M.)

編集委員：衛藤光明 松本美由紀 山内義雄 保田叔昭 安武 章

国水研ホームページ <http://www.nimd.go.jp>

発行所：環境省 国立水俣病総合研究センター

〒867-0008 熊本県水俣市浜4058-18 TEL 0966-63-3111 FAX 0966-61-1145

発行日：平成13年8月1日

発行責任者：国水研だより編集委員会

※この用紙は再生紙を使用しています